

# Humanity & Nature

## Newsletter



No. **87**  
January 2023

地球研ニュース

今号の特集

P2 特集1

所長対談

ぼくらは、なにに、  
どうして  
心ときめかせたのか

澤田昌人 + 山極壽一

P8 特集2

座談会

対話を編む

『葬いとカメラ』座談会

梅原志歩 + 金セツピョル +  
地主麻衣子 + 中尾世治  
大澤隆将

P13 特集3

SRIREPプロジェクト企画

サトウヤシ繊維ネット  
の可能性

地球研の苑路脇で実験中

アンディ・パティワレ・メタラガスマ +  
アミ・アミナ・ムティア

地球研のロゴマークが新しくなりました



Research Institute for  
**Humanity and Nature**  
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

2022年に設立20周年を迎えたことを記念して、地球研のロゴマークを刷新しました。左のシンボルマークは「人のつながり」を意識したもので、右のロゴタイプは英語名を強調しました。人と自然との関係性を研究するユニークな研究所であることを、国際的に発信します。

連載 P16 表紙は語る……君嶋里美

# ぼくらは、なにに、どうして 心ときめかせたのか

話し手● 澤田昌人（京都精華大学学長）+ 山極壽一（所長）

叡山電鉄の軌道を挟んで向かいあう地球研と京都精華大学。トップはともに京大大学院学部人類進化論講座の出身。世界の霊長類学を牽引していた伊谷純一郎教授の薫陶を受け、アフリカをフィールドに研鑽をつみ、酒を酌み交わしてきた先輩と後輩。アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民などの文化人類学的研究に進んだ澤田新学長を所長室にお招きして、ゴリラ研究の第一人者の山極所長が研究への視座、人間社会と文化の歪みをつみとめる

山極● 私たちに縁の深い精華大学の学長にご就任、おめでとうございます。

澤田● ありがとうございます。前身の京都精華短期大学を創設するとき、美術科の主任教授として洋画家の伊谷賢蔵先生が京都学芸大学（現・京都教育大学）から赴任された。伊谷純一郎さんのお父さまですね。半年くらいで病を得るのですが、短い間に強烈な影響を残された。いまの芸術学部やデザイン学部、マンガ学部誕生の契機となるものでした。

山極● その話を聞いて思い出したのですが、タクラマカン砂漠にあった「さまよえる湖（ロプ・ノール）」の痕跡を発見したスウェーデンの探検家、スヴェン・ヘディンは1908年に来日して、東京大学と京都大学を訪ねています。京大側のホストは東洋史の内藤湖南。そのときに、京都市美術工芸学校（現・京都市立芸術大学）<sup>かのこぎたけしろう</sup>の鹿子木孟郎さんが、ヘディンがスケッチした絵を学生たちに模写させた。ところが、ヘディンの絵には残っていないものがある。

澤田● しかし、模写で残されたわけだ。

山極● 私が京大総長時代の2017年に、文学部の田中和子教授の企画で京大に残っていた原画と模写を百周年時計台記念館で並べて展示しました。そのとき地球研でも活躍された齋藤清明さんに言われたのですが、伊谷さんの師匠で生物学者の今西錦司さんは1902年生まれで、ヘディンが来日した1908年はまだ6歳。ところが、探検家でもある今西さんは、その鹿子木さんの

娘と結婚された。

澤田● 奥さんのお父さんから、ヘディンの絵を見せてもらったのかな……。

山極● ヘディンが京都にきた話を聞かされ、スケッチも見た。それで探検熱を吹きこまれたのではないかと。京大の探検熱とフィールドワークの精神は意外なところで芽吹き、代々受け継がれてきたのではないかと。

澤田● あいかわらず楽しい話にするのがうまいね。（笑）

## 今西錦司が拓いた 「学術としての探検」、 伊谷純一郎がこだわった カルチュア

山極● 世界には人が歩いて行ける三つの極地があって、北極と南極とエベレスト（チョモランマ）。南北の極地は20世紀初めに征服されて、残るエベレストの踏破に国を挙げての競争が繰り広げられていた。でも今西さんは、「国なんかどうでもいい。未知の世界を自分の目で見て、それを記録するのが夢だ」と、これを次々に実現した。今西さんのいちばんの功績だと思うね。「学術としての探検」は日本独自のもので、世界に先駆けて方向転換した。

今西さんはあまりスケッチを残されていないが、伊谷さんも、民族学の梅棹忠夫さんも、スケッチの名人でした。

澤田● そう、京都大学総合博物館での「梅棹忠夫生誕100年記念『知的生産のフロンティア』」を観て驚いたのは、やっぱりスケッチのうまさ。

山極● 梅棹さんは、調査地の家の構造、調度品などを一瞬に把握して、それをスケッチで忠実に再現できた。フィールドワーカーとしてもってこの能力でした。

澤田● 伊谷さんもサルの

スケッチがおじょうずだった。何千枚も描いた人でないと、ああは描けない。院生のころ伊谷さんに、「お父さんは著名な洋画家だから、そっちの道に進もうとは思わなかったですか」と尋ねたら、「父から、お前は器用すぎるからアーティストは無理だ」と。山極● しかし、伊谷さんは驚くべき速さで文章を書いた。

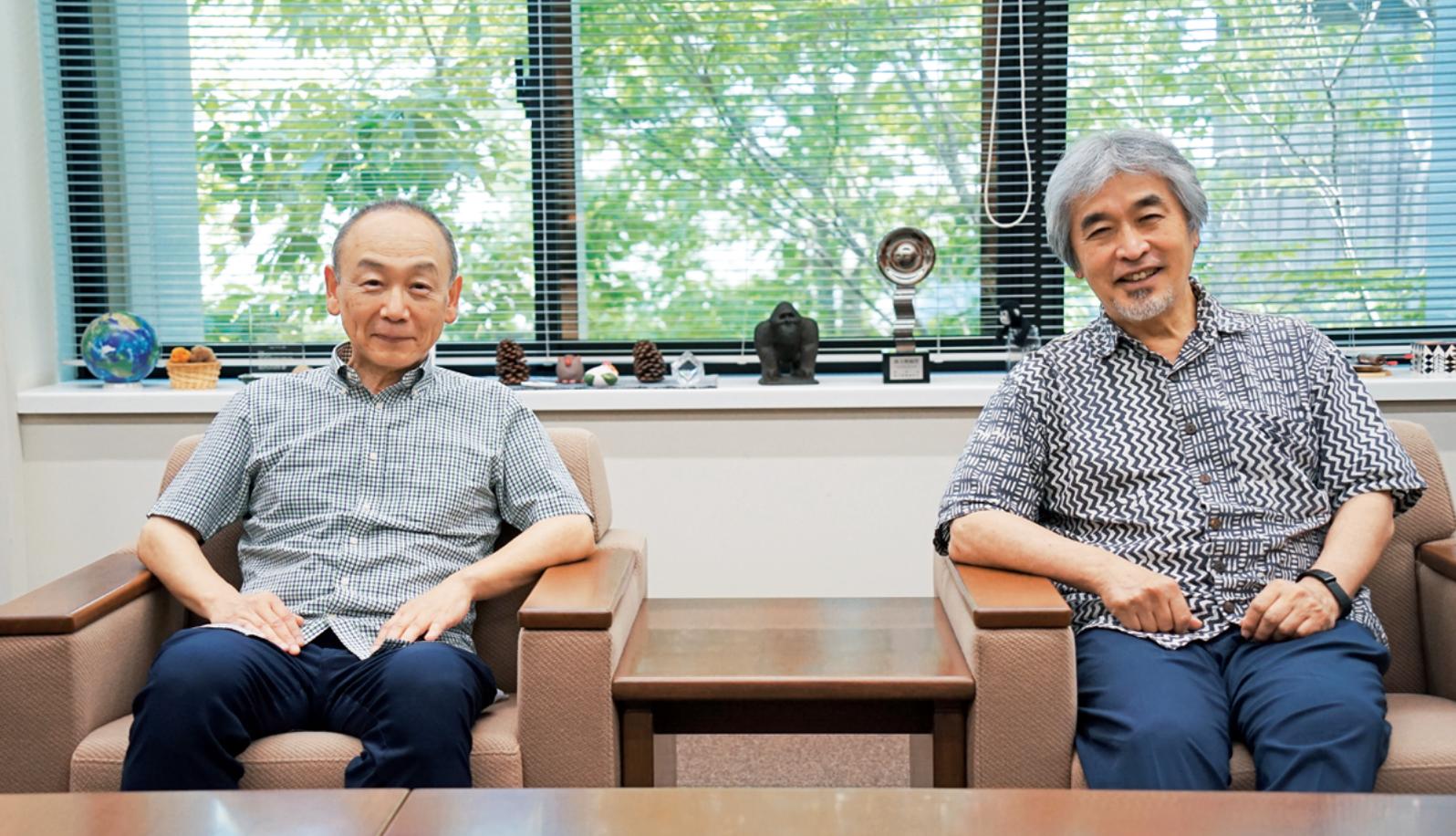
今西さんが伊谷さんに伝えた面白い言葉は、英語のCultureではなくて日本語でも英語でもない「カルチュア」。自然を理解するにはロジックだけではだめだということ。伊谷さんは、ことさらロジックにこだわった人で、社会構造とか社会関係論のなかで平等性や不平等性に熱心に取り組んだ。でも、そんな伊谷さんがこだわったのは、カルチュアとアイデンティフィケーション。今西さんが立てた設問に生涯をかけて答えようとしたんだと思う。

澤田● この地球研もそうだけど、京都にかぎらず、日本の研究所や博物館の多くは、今西さんがつくったグランドデザインのものとできていますね。そのひとつに「人類進化」があって、山極さんやぼくらは、そこに惹かれていった。

山極● 地球研の創設者の日高敏隆さんは、「地球環境問題の根幹は人間文化の問題だ」と言い切った。自然科学ではないと。ぼくも、あらためて文化ってなんだと考えましたね。文化はぼくたちの意識のなかに埋めこまれていて、それが行為となって表れてはじめて生産物になる。文化の



澤田学長の大学院生時代。コンゴ盆地に暮らすエフェ・ビッグミーの集落で調査を重ねた（1986年1月）



澤田学長を所長室に招いての対談は、共通の恩師、伊谷純一郎氏との思い出話から始まり、終始なごやかな雰囲気につつまれた。対談を終えて記念の一枚。カメラを向けると澤田学長は、「不思議な縁だね。恥多き二つの人生が並んでいるという感じで、なんだか申しわけないね」とほえんだ

本質にはいろいろな価値観が入っていて、それを情報として取り出すことはできないのではないかな。それこそが今西さんがカルチュアとよんだものであり、伊谷さんが「規矩」と表現したもの。伊谷さんが「関係」にこだわった理由もそこにある。サルの社会関係は行動を見て初めてわかるが、そこにはサルたちが身体で合意した価値観が反映されている。

澤田●伊谷さんの「規矩」というのは、自然のルールのことですね。

山極●そういう考え方のなかに、アートという表現方法もあるのではないかとね。

澤田●伊谷さんは論理にこだわったといいながらも、言葉の端ばしにはいつも審美眼

のようなものがありましたね。

山極●ぼくが伊谷さんの文章でいちばん好きなもの、『自然がほほ笑むとき』の一節。「けっして忘れることのできない、なにか凝縮された刹那についての、いくつかの回想がある。(中略)うんざりするほど長いフィールドワークの末に、自然が観察者にほほ笑みかけてくれた瞬間、とでも表現すればよいのだろうか」と。研究者が一生のあいだに何回か得られる歓喜。

澤田●われわれフィールドワーカーにとっては、またとない瞬間ですね。

山極●伊谷さんは、「そういう豪華な世界を垣間見る瞬間を逃してはならない」と。その言葉がずっと心に残っていて……。

ぼくらが、なぜ苦勞してアフリカの奥地にまで出かけるのかといえば、もちろんゴリラの秘密を知りたいから。だけど、その土地の人や文化も含めて、自分が美しいと思う、あるいは、エエッ！と驚く、まさに豪華としかいいようのない瞬間になん

ども出会えるから。ぼくらはそれを心にしまっておいて、あるときは文章にし、あるときは写真に写す。

澤田●ぼくらはフィールドワークをしながら、ただデータを集めるだけでなく、現地と幅の広いつきあい方をしてきた。それは伊谷賢蔵先生あたりの世代から受け継がれたもののような気がします。

## 偏見に満ちた 「暗黒大陸・アフリカ」 リアリティと余白の力

山極●ぼくの子どものころのアフリカは暗黒大陸と呼ばれ、暗い森の中に住んでいる人たちは邪悪な心をもっているから、文明の光を当ててあげなくてはいけない。「マウマウ団」なんていうのは、とんでもない悪党集団だと教えられた。(笑)

澤田●18世紀、19世紀にアフリカ大陸を横断した探検家のものの見方が受け継がれていましたね。

山極●それをヨーロッパ経由で、信じていたのが日本だった。ところが、まったくちがうとわかった。思い直さきっかけになったのが、伊谷さんの『ゴリラとピグミーの森』でした。



コンゴ民主共和国カフジ・ビエ国立公園にて  
顔なじみの公園職員たちと(2005年3月)

(次ページにつづく)

ぼくらは、なにに、どうして 心ときめかせたのか



澤田昌人学長

澤田●ぼくもそうです。

山極●伊谷さんがケニアのバーで飲んでいたらケニア人がやってきて、「1杯おごってくれ」という話になった。インド人のパートナーは、「こいつらにおごる必要はない」と忠告したけれど、伊谷さんは気にせずにケニア人の話を聞いて、また1杯おごったという。そのころのケニアは独立前夜。ケニア人はそれまでの偏見を乗り越えて自立の道を歩み始めていた。伊谷さんはそういう偏見に満ちた世界を、フィールドワークを通して塗り替えようとした。そのことが文章からありありとみえる。

澤田●『ゴリラとビグミーの森』の時点で、すでに伊谷さんの文体は完成されていましたね。ぼくは、あの文章のうまさにやられた。人類進化論講座に入った人で、あの本を読んでない人はいなかった。

山極●そう、バイブルになっていたね。

澤田●いい文章は、それほどの影響を与える。梅棹さんの『文明の生態史観』もそうでした。

山極●でも、おもしろいことに、伊谷さん、梅棹さん、河合雅雄さん、みなさん物書きだけど、文体はぜんぜんちがう。だから、惹かれる人たちの層もちがう。

澤田●アフリカでは、何か月も日本人は自分独りだけ、という状態ですごくことがありますね。日本語を話すことも聞くことも

ない。せめて日本語を読みたくなるから、本を何冊ももっていく。だけど、コンゴの森で読むとその日本語にリアリティを感じられない本が多い。圧倒的に異質な現実の前では、本の内容がみんな嘘っぽくみえるというか、どうでもいいように思えてしまう。でも、何冊かは耐えきれるのがあって……。

山極●どういう本ですか。

澤田●伊谷さんは、ゼミのなかで「特論」と称してときどき俳句の話をしました。与謝蕪村や松尾

芭蕉がお好きでした。それであるとき、『蕪村句集』と『野ざらし紀行』をもっていった。すると、コンゴの熱帯森林の中の現実に照らして不思議とリアリティがあるんですよ。彼らの俳句の情景が、目の前にいる熱帯林の人間と重なる、繋がる感じがするのです。アフリカの現実に通じる日本の文学があるというのは、おもしろい発見でした。

山極●西田幾多郎は1927年の論考『働くものから見るものへ』のなかで、「日本人の情緒は、形なきものの形を見、聲なきものの聲を聞くところにある」といっています。その例証に、「雪舟や上村松園などの日本画には余白の美というものがある」と。

西洋の絵はかならず背景が描かれていますが、日本の絵には背景のないものが多い。そこに形はないが、なにかが見える。空にツバメが飛んでいるとか、だれかが遠くで手を振っているような、形なきものが見えて聲なき聲が聞こえる。そうした聲は、実際には聞こえないが、オノマトペのような人間の言葉に翻訳されて、聞こえているかのような情景を感じるのが、日本人の情緒だと。ま

さに、俳句はその入り口を与えてくれるものかもしれませんね。

あの世とこの世を二分法で峻別する西洋、三途の川を往来する日本

山極●ぼくたちは、「こっち」と「あっち」を二分法で峻別する思考法に慣れていなくて、両者に介在して揺れ動くような世界観がある。西田のそのような考え方は「場所の論理」とか「間の論理」と呼ばれている。

たとえば「あの世」と「この世」とのあいだに流れる三途の川は、そのどちらにも属さないし、どちらにも属すともいえる。「あの世」は「この世」と地つづきになっていて、川渡しの人夫に六文銭を渡せば背負って向こう岸に渡してくれる。向こうに渡っても、盆には戻ってこられるという相互流通可能な場所。あの世とこの世とのあいだには、そういう曖昧なものが挟まっているという世界観です。

澤田●アフリカの森に暮らす人たちも似ていますよ。死んだらどこに行くかというところ、この世界と隔絶した天国や地獄ではなく、いま暮らしている森のどこかに暮らすことになると思っています。

ちょっと踏みこんだ言い方をすると、そういう感覚があればこそ、この世界の美しさが見つかるのだと思う。自分が死んで別の世界に行くとしたら、いまいるこの世界



エフェ・ビグミーの人たちの踊り (1990年、写真・澤田昌人)

の美しさ、かけがえのなさを、リアリティあるものとして受け止められるでしょうか。死ぬとまったくちがう世界に行くとしたら、生きているあいだにこの地球の環境や生活にどれほど責任感をもてるのか疑問ですね。

山極●おっしゃるとおりです。変えるべきは、「人間は本来、悪なんだ」という考え。

哲学者のトマス・ホプズがいうように、人間はほっておけば闘争をはじめた邪悪な心をもっている存在だと。

澤田●だいたい当たっています。(笑)  
山極●だからこそ、神の教えに従って、見えざる神の手で圧力をかけて秩序を保ち、平和にしなければいけないと。

澤田●互いの人の権利の保障のために国家権力をつくったとするトマス・ホプズの主張、リヴァイアサンが必要なのだ、ということになってしまいますね。

## 美しい、敬えると思うものは、すべてカミである

山極●屋久島の廃村に移住して24年間を暮らした山尾三省という詩人がいます。彼は『アニミズムという希望——講演録・琉球大学の五日間』という本を1999年に書いて、2001年に亡くなった。

澤田●ぼくも生前にいちどだけお目にかかったことがあります。

山極●その2001年は、伊谷さんが亡くなった年で、地球研ができた年でもある。彼が

いうアニミズムは、「美しいと思うもの、敬えると思うもの、好きだと思えるもの、これはみんなカミだ」というものです。それが美しいと思えたときにその対象に向かって語りかけると、まことの自分が映し出される。それがカミというものの存在価値であり、そうした畏敬の念を呼び覚ませるものをもっていることが、人間の生きる価値なのだ。

澤田●その話で思い出しますが、精華大のマンガ学科にはキャラクターデザインコースがあります。人気のある学科で、中国や韓国からも絵のうまい学生がたくさんきます。オープンキャンパスでは、上級生が下書きなしのライブペインティングで壁に絵を描くのですが、それがもう舌を巻く出来ばえ。

その先生がおっしゃるには、キャラクターを生み出すことにかけて日本は決定的に有利な国で、日本文化にその素養があると。つまり、キャラクターとはなんぞやというと、「人間でないもののなかに人間を見ること」だと。葉っぱを見て、自分と同じものが見えれば、葉っぱをキャラクター化できる。そんなことまで考えているのかと感心します。

山極●12世紀の「鳥獣戯画」がまさにそう。カエルやウサギやサルを人間にも見える姿で描いています。人間はあっちの世界にも入っていけるんですよ。これからの環境問題の解決策は、それ。(笑)

西洋は二分法で排中律に基づく世界観をもっています。西洋の思想は人間とそれ以外のものを完全に分けて、それを客観視することを伝統としている。しかも、そのうえに科学・技術



山極壽一所長

が現れた。いっさいのものを人間の都合のよいように作り変えてよいという赦しを、人間は唯一の神から受けとった。これも、「この世はそもそも悪である」という話とつながっていて、「それをより善きものにした功績」として、天では永遠の命が得られるという話になる。本来は人間が悪なのに、自然はほっておくと邪悪な心が渦巻いて人間に悪さをすると考える。森も海も悪の住処だと。

澤田●そうになってしまうね。

山極●日本人にとっての森や海は、カミさまのいるハレの空間。人間も動植物もすべて、そもそもが善で、美しいものと考え。そのうえで、自分が認知した環境——海にしても岩にしても虫にしても、自分とのあいだに特別な関係を見出すのがアニミズム。つまり、アニミズムは宗教ではなく、環境のとらえかたです。

澤田●そのとおり。自分を写した姿としてこの世界をみたときに、環境をどう保つか、より美しいものにするかどうかは、自分たち自身をどのように美しくするかと裏腹だということですね。

## 対象にとことん向きあうことで、対象と自分との境界が消えた

澤田●問題は、科学・技術の世界に生きていくわれわれは、どうすればモノのなかに自



ルワンダ共和国火山国立公園にてゴリラの「のぞき込み行動」を撮影 (1982年10月、写真・山極壽一)

(次ページにつづく)

## ぼくらは、なにに、どうして 心ときめかせたのか

分の姿をみつけたかですね。

いくつか方法はあると思うのですが、精華大マンガ学部の創設者のお一人のヨシトミヤスオさんから聞いた話が頭に残っています。彼は、動物も植物も人間のように描ける優れたカートゥーニスト（一コママンガ作家）でした。そのヨシトミさんは学生たちに、「夏休中に3,000枚のデッサンを書け」と指示して動物園にほうりこんだそうです。学生たちは朝から晩まで、半泣きでデッサンに取り組むのですが、1年で伊谷さん並みにうまくなるそうです。（笑）

ヨシトミさんに、「なぜデッサンをさせるのか」とたずねたら、先生本人も美術学校に通っていた当時、先生の指示で動物園で一所懸命に描いたそうです。でも、帰って見せると、「なんじゃこれ」とボロカスにいわれる。なにくそと思いながら描いても、またけなされる。そのうちにどんどん元気がなくなってくる。そんなある日、ダチョウを観察していたら、その顔がにつき先生の顔にみえて、「この野郎」とデッサンしたら、初めて褒められたそうです。「お前はみた」と。「ダチョウに人間を見ることができた」、そういうことだと思った。（笑）

山極●ぼくらは今西さんに、「おまえ、サルになってこい」といわれて、サルの群れに入って毎日サルの行動を追いかけてきたね。絵は描かなかったが、一頭一頭のサルの顔を識別し、その個性を認識することを学びました。最初はできなくとも、1か月もすると個体識別ができるようになる。顔の傷や毛並みなどの特徴を頼りにせずとも、人を見分けるのと同じようにできるようになる。

澤田●後ろ姿でもサルの名前がわかるそうですね。

山極●そう、そうになるとサルたちの関係性がビシッとみえてくる。

澤田●サルのなかに自分の姿がみえるようになって、自分もサルのグループのなかに棲んでいる気持ちになって、サルの社会がみえてくる。（笑）



澤田学長が養蜂の調査をしていたころ、京都大学吉田キャンパス北部構内にて、調査荷物を積みこんだ単車の前で。背後の建物は、いまはなき動物学教室の旧館。地球研の初代所長・日高敏隆さんや川那部浩哉さんの部屋があった。バイクの右手には、人類進化論教室と自然人類学教室が入った小さな別館があり、その一室で山極所長と二人、机を並べていたという（1983年10月28日、写真・高畑由起夫）

山極●その意味では、ぼくにとってゴリラはカミ、背後霊のようなもの。（笑）

澤田●山極さんが最初に書いた『ゴリラ』に、「雄ゴリラの寝姿に、そっと自分の人生を重ねてみた」という文章があったでしょう。あれは印象に残っている。（笑）

山極●タイガーという名前がついた独りゴリラですね。

澤田●そのころの山極さんは独り者だったから、独りゴリラの情けない寝姿に自分を重ねた。そういう経験があって、山極さんのゴリラ研究に深みが出た。（笑）

山極●自然人類学教室で、人と文化、自然への美的感覚も磨くことになった。

### 共感力を発揮する 相手と方法を間違えた人間

山極●地球研に長くいたオギュスタン・ベルクというフランス人地理学者は、和辻哲郎の『風土——人間学的考察』に感銘を受けて、「風土学」をはじめた。そのベルクさんが注目する思想家がフォン・ユクスキュル、西田幾多郎、和辻哲郎、今西錦司で、いずれも1930年代から40年代の初めに出した論者が評価されています。つまり、第一次と第二次の世界大戦のあいだに重要な環境思想、生命哲学が出たのではないかと。ところが、第二次世界大戦が始まると競争の時代。

澤田●総力戦の時代。

山極●そういう競争に明け暮れた結果、戦後は資本主義が世界を制するようになった。右肩上がりの経済至上主義の社会に変貌するなかで、生命哲学や環境思想は置き去りにされ、無視された。

しかし、21世紀になって人新世やプラネ

タリー・バウンダリーという概念が提唱された。地球環境はもう限界に達している、「このままではまずいぞ、われわれはどこかで間違ったのではないか」。この間違いを正して、新しい価値観を創造しないとイケない。そういう時代にあるいま、ぼくが重要に思うのは、「人間というのは悪ではなくて、善だ」という価値観への転換。

澤田●善といわれて自分の胸に手を当てると、ちょっと怪しいのですが、悪といわれるのもちょっといやだしね。（笑）

山極●悪というものをつくり出すことで、善を際立たせてきた。その結果、スポットライトを浴びた善は、戦争を肯定する善、環境を破壊することを許す善になってしまった。これは間違いだった。

すべてが善というわけではないが、ゴリラの社会やサルの社会と人間の社会をくらべると、人間は共感力を発揮して進化してきたと思うのですよ。共感力は対人間のこともあるし、ほかの動物種や生物に対する共感でもある。その力を発揮して、人間は自然環境とも調和できる人間らし



ルワンダ共和国火山国立公園でミケネ山を望む（2008年11月）

地球研所長、京都大学理学部卒業、同大学院理学研究科博士課程単位取得退学。理学博士。ルワンダ共和国カリソケ研究センター客員研究員、日本モンキセンター研究員、京都大学霊長類研究所助手、京都大学大学院理学研究科助教、同教授、同研究科長、理学部長を経て、二〇二〇年九月まで京都大学総長。二〇二二年四月から現職。専門は人類学、霊長類学。



さわた・まさこ

京都精華大学学長。京都大学理学研究科博士後期課程修了。理学博士。大学の卒業研究で京都北山の山中に散在するさまざまな「カミ」さまを調査。院生時代は研究テーマを探して東北地方の僻地、南西諸島の孤島を巡り、紀伊半島南部におけるニホンミツバチの養蜂に出会う。その後、アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民、農耕民の世界観の研究に取り組み。コンゴ民主共和国で、勃発した戦争から避難したことを契機に中部アフリカの現代史にも関心をいだき、研究を続けている。山口大学教育学部講師を経て、京都精華大学に赴任。二〇二二年四月から現職。

い生活をデザインしはじめた。ところが、どこかで狂ってしまった。共感力を発揮する相手や方法を間違えた。

**共感力を醸成し、媒介となる芸術**

澤田●自然科学、とくに植物や動物の研究では、懸命に観察すれば、どこかで対象そのものに共感するはずなのにね。

山極●それ思い出すのは、ハナバチ類の研究の大家の坂上昭一さん。あの方は、ブラジルでミツバチの個体識別をした。ミツバチの体に何色もの印をつけるのですが、色と場所をすこしずつ変えて、その組みあわせで個体を識別していた。

山極●たとえば、澤田さんも最初はニホンミツバチの養蜂の研究をしていましたね。

澤田●だから縁があるといえばあって、一度だけお目にかかったことがあります。坂上さんは、科学的な厳密さはもちろんですが、ミツバチを個体識別して、自分もミツバチの一員のごとき迫力で迫る。そうして、ミツバチ社会における個体の役割分担などを徹底的に解き明かす仕事をされた。

山極●人間には特殊な能力があって、イメージの中で身体の拡大も縮小もできま

すからね。

澤田●環境が大切だという根底には、人間は周りの世界に入りこむことができるという共感力があると思うんです。

山極●人間のそういう共感力は、美術の手法によって可能になると思うのです。ウイルスは目に見えませんが、それが絵になってようやく納得できる。でも、それは現実の姿ではない。ウイルスは透明で、色もついていない。細菌や細胞内物質も同じで、だれかが色をつけて形にしてみせるから、こういうものかと納得する。私たちが想像するイメージを、拡大したり縮小したりして、われわれの目線にあうものにしてくれるから、この世界が理解できる。

ピカソの「ゲルニカ」だって、現実にはあ

り得ない情景だけど、その絵がつくり出す世界のイメージが迫ってくるから、感動する。絵画はそういう力をもっているんだね。人間がもっているイマジネーションそのもの。人間はその能力を、言葉を手に入れるまえから具えていたかどうかはあきらかではないが、現実をデフォルメして頭のなかでつくり変える能力を育ててきた。しかも、それを他者と共有できるかたちにするのが芸術家の業。

いまは情報社会で、みんなが情報に誘導されて美的感覚などを一律にもたされてしまう時代。これはある意味で恐ろしいことで、全体主義につながるかもしれない。自らの五感で、対面して、経験して、これは美しい、これは汚らしいという感覚を得る

ことができなくなっている。だからこそ、動物園に通ってスケッチする体験が必要なのではないかな。

自分の好きなもの、美しいものを、個人個人が五感で会得して、他者と対話しながら共有すべきものをつくるプロセスが必要です。その触媒となる手段が本であったり、詩や音楽であったり、絵画などの芸術であったりするのだと思うね。

澤田●科学的な手順、つまり論理的な手続きと、芸術的な手順、つまりさまざまな形式での表現とは、正反対の行為のように思われるかもしれないけれど、まわりの環境に没入して、そこで見えてくる世界を表現しようとしている点では似ているのかもしれませんね。

(2022年7月26日 地球研所長室にて)

**対話のなかに登場した人物と関連書籍 (五十音順)**

- 人物**
- 伊谷賢蔵 (いだに・けんぞう) 1902-1970  
洋画家、書家。伊谷純一郎の父。精華大学の前身・京都精華短期大学の創設期に美術家教授として赴任。
  - 伊谷純一郎 (いたに・じゅんいちろう) 1926-2001  
生態学者、人類学者、霊長類学者。今西錦司の跡を継ぎ、日本の霊長類研究を世界最高水準に牽引。
  - 今西錦司 (いまにし・きんじ) 1902-1992  
生態学者、文化人類学者、登山家。日本の霊長類研究の創始者として知られる。
  - 梅棹忠夫 (うめさお・ただお) 1920-2010  
生態学者、民族学者、情報学者、未来学者。
  - オギュスタン・ベルク (Augustin Berque) 1942-  
フランスの地理学者、東洋学者、思想家、翻訳家。「風土学」という環境人間学を打ち立てる。
  - 鹿子木孟郎 (かのこぎ・たけしろう) 1874-1941  
肖像画を得意とした洋画家。
  - 河合雅雄 (かわい・まさを) 1924-2021  
日本の霊長類学者、児童文学作家。
  - 坂上昭一 (さかがみ・しょういち) 1927-1996  
生物学者。ハナバチ類の比較社会学研究に取り組み、その進化を論じた。
  - スヴェン・ヘディン (Sven Anders Hedin) 1865-1952  
スウェーデンの地理学者、中央アジア探検家。中央アジア、タリム盆地のタクラマカン砂漠北東部に、かつて存在した塩湖「ロブ・ノール」を発見。
  - トマス・ホブズ (Thomas Hobbes) 1588-1679  
イングランドの哲学者。唯物論の先駆的思索をおこなった哲学者の一人。近代的な政治哲学を基礎づけた人物としても知られる。
  - 西田幾多郎 (にしだ・きたろう) 1870-1945  
日本の哲学者、京都学派の創始者。

- 日高敏隆 (ひだか・としたか) 1930-2009  
動物行動学者。総合地球環境学研究所の初代所長。
  - ヤーコプ・ヨハン・パロン・フォン・ユクスキュル (Jakob Johann Baron von Uexküll) 1864-1944  
ドイツの生物学者・哲学者。「環世界説」を提唱。
  - ヨシトミヤスオ (本名・吉富康夫) 1938-2018  
日本の漫画家、絵本作家。動物が主人公の風刺漫画で知られる。
  - 和辻哲郎 (わつじ・てつろう) 1889-1960  
哲学者、倫理学者、文化史家、日本思想史家。
- 関連書籍**
- 『アニミズムという希望—琉球大学の五日間 [新装]』山尾三省著、山極壽一解説、2021、野草社
  - 『ゴリラ』山極壽一、2005 (第二版 2015)、東京大学出版会
  - 『ゴリラとピグミーの森』伊谷純一郎、1961、岩波書店
  - 『高崎山のサル』伊谷純一郎、1993、講談社 ※ 2010年に講談社学術文庫で文庫化
  - 『自然がほほえむとき』伊谷純一郎、1973、平凡社
  - 『生物から見た世界』ユクスキュル、2005、岩波書店
  - 『生物の世界』今西錦司、1972、講談社
  - 『日本動物記』今西錦司編、1955、光文社
  - 『野ざらし紀行』『芭蕉紀行文集』松尾芭蕉、中村俊定校注、1991、岩波書店
  - 『働くものから見るものへ』『西田幾多郎哲全集 第4巻』1965、岩波書店
  - 『風土—人間学的考察』和辻哲郎、1979、岩波書店
  - 『蕪村句集 現代語訳付き』与謝蕪村、玉城司訳、2011、KADOKAWA
  - 『文明の生態史観』梅棹忠夫、1998、中央公論新社

## 対話を編む 『葬いとカメラ』座談会

出席者●梅原志歩（株式会社左右社 編集者）+金セツピョル（研究基盤国際センター 特任助教）+地主麻衣子（アーティスト）+中尾世治（京都大学アジアアフリカ地域研究研究科 助教）

『葬いとカメラ』は不思議な本である。章にあたる「プログラム」の冒頭で葬儀をめぐる映像記録作品の概要が示され、それをふまえて、制作者である研究者とアーティストが作品にこめた意図や社会的背景を対話形式で語りあう。こうした対話は、明確な答えやわかりやすい結論をもたらさない。しかし、(読者を含む)参加者たちは言葉のやりとりをとおして、言葉にすることが容易でない「死」に対する考えを深めてゆく。対話は、学際的/超学際的な研究やサイエンス・コミュニケーションの場で、中心的な役割を負う活動である。異なる背景をもつ人びとが対話し、それを編集してゆく背景には、どのような意図と苦労があったのか。本書の編者である金と地主にくわえ、編集者の梅原、研究者の中尾をコメンテーターに迎え、そうした対話が編みあげられてゆく作業と意図について語ってもらった



地球研ハウス「なごみ」での座談会を終えて、テラスで歓談。左から、大澤さん、梅原さん、地主さん、金さん、中尾さん

大澤●この本の特徴は、なんといっても対話ですよ。異なる経歴をもつ人びとが、映像を見ながら葬いと死について語りあう。これは、学際的/超学際的な研究の場で行なわれる対話ととても似たものを感じました。

ここで気になったのは、金さんや地主さんは、こうした知識のちがいを乗り越えたり、統合したりすることを意識しながら編集作業を行なったのでしょうか？あるいは、ちがいはちがいのまま残しておこうとしましたか？ どういった編集過程だったのでしょうか？

### 対話原稿をつなげる、削る、つぎ足す

金●編集作業でまず意識したのは、意味のまとまりをつくることです。この対話のもととなる座談会は2泊3日の合宿で行なわれたのですが、この座談会の文字起こし原稿を何回も読みこみました。話された言葉は、こういう内容が話されていたと思うと次の瞬間にはちがう内容になってい

たり、二人が対話しているように見えて、じつはお互いにちがう話をしていたり、いきなり関係ない話に飛んでいったりするなど、カオスです。

そこで、「この人のこの発言とこの人のこの発言をつなげたら、こういう意味になるだろうな」みたいなのを探し出して、くっつけて、ひとつにまとめるような作業をしてゆきました。しかし、意味のまとまりをつくることは、それ以外の部分は切ることになります。

地主●私はほとんど切るという作業をしていなくて……。金さんがまず書き起こしてから編集の大枠をつくってくださったので、私がやったのはそこからです。

金●地主さんは逆に私が切ったものを付け足してゆく感じでした。

地主●たとえば、私と金さんのなかでいちばんの対立があったのは、プログラム4の二藤建人さん\*1の内容でした。二藤さんの語り口はかなり独特で、一見本筋に関係なさそうな、でもすごくおもしろい細部のあるエピソードが途中で入ってきたりす

るんです。私はそういう部分に魅力を感じていたんですが、金さんは私が好きなのところを全部バッサリ切っていて……。 (笑) ここは残してほしいと言うと、「これがあると話の筋がわかりづらい」と返されました。(笑)

二藤さんの口調も、ニュートラルな書き言葉っぽい感じに整えられていて、これだと元の語りにあったおもしろさが全然伝わらないんだよなあと思って。なんとか金さんを説得して、二藤さんの語りの雰囲気がかたに落ち着きました。

大澤●金さんは、話をつなげて削って、発言の内容をシンプルにして明瞭にしようとした。でも、地主さんが重視したのはもつとありのままの臨場感ですね？

地主●そうですね。私は本を読むのが好きなんですが、良い本を読むと、どこかに連れていかれるような感覚があります。せっかく自分も本づくりにかかわれるのなら、そういうものをつくってみたいと思いました。

\*1 アーティスト。『葬いとカメラ』のプログラム4にて、「生と死」についての自身の作品を、独創的な語り口で解説している。

進行・編集●大澤隆将（金沢大学国際基幹教育院講師）  
 ※座談会収録時は、地球研上級研究員

『葬いとカメラ』

2021年5月30日 株式会社左右社 発行  
 四六判変形並製本 200ページ  
 ISBN 978-4-86528-031-9  
 金セツピヨル＋地主麻衣子 編著  
 装幀・装画：牧寿次郎

もくじ

はじめに

討論参加者紹介

プログラム1 変化する葬い、異なる立場からみえてくるもの

プログラム2 葬儀を撮ることとは何か

プログラム3 名前のある骨、名前のない骨

プログラム4 土の下の世界／非倫理性

総合討議

〈解題〉 討論を終えて（金セツピヨル／地主麻衣子） ゲスト：鄭梨愛

〈総論に代えて〉 噛み合わなかった話についての話

—— 研究者とアーティストの協働でみえてきた、葬いを映すことの意義（金セツピヨル）  
 おわりに



軽い気持ちで言っただけだったので、「えっ、なんでそこでそんなに反応してくるの」と思いました。けれども、それがまた地主さんに対する興味につながってゆくというか。だからこそ本ができたのだと思います。お互いに興味がないと、「話がぜんぜん通じない」か、たんに内容をまとめただけの本になったと思います。

地主●そもそも私が金さんといっしょに合宿をして本をつくりたいと思ったのは、金さんの論文や映像作品を拝見して感銘を受けたからです。「この人ともっと話してみたい、この人だったら腹を割って話しても大丈夫そう」という感じがしたんですよね。だからなにかいっしょにしてみたいと思いました。

でも、本をつくっていくなかで、金さんがアートについて語る時、どうしても違和感を覚える部分がありました。たとえば、金さんは「意義」ということばをよく使われていたのですが、私は「意義」という観点からアートについて考えたことがなかったし、「アートの意義」について考えることがどうしてもしっくりこなくて。

総論にも最後のほうまで「意義」が出てきていたんですが、編集の最終段階で、金さんが「意義」の部分のカットしたんです。金さんは、「アートを語るうえで意義ということばは相応しくないと思うので、カットします」とおっしゃった。それを聞いたときに私は、「金さんが『意義』を捨てた！」

（次ページにつづく）

そのためには、内容がわかりやすくまとまっているだけじゃダメだと感じていて。どうやったら本と読者が一体となってドライブし始めるんだろう、ということを考えていたような気がします。

折れない議論の到達点

大澤●たしかに発言内容の明快さと、ちがう場所に連れていってくれるような臨場感は相反しそうですね。編集作業で、喧嘩しましたか？（笑）

金●ちょっとイラッとすることもありました。（笑）

地主●梅原さんに入ってもらってからは、だいぶ楽になりましたよね。（笑）

金●それでも、本質的にはイラッとしていないというか……。基本的小互いがお互いに興味があるのです。どうして地主さんはこんな反応をするのだろうって……。

私が軽い気持ちで「本を読みやすくするために、こうしよう」というと、地主さんが「そんなわけにはいかない」と言うわけです。私は



『わたしたちは（死んだら）どこへ行くのか』 第1章 東京の墓地  
 （地主麻衣子 2019,18分）



『わたしたちは（死んだら）どこへ行くのか』 第4章 名前のない骨  
 （地主麻衣子 2019,37分）

## 対話を編む

## 『葬いとカメラ』座談会

と思いました。(笑) そのときが私のなかで記念的な瞬間です。

金●この本は、可視化・高度化事業<sup>\*2</sup>の成果でもあるんですよ。なので、事業をなりたいだけじゃなく、はいけないという思いがあったのです。そのために、いっしょにやったことでいったいなに見えたのか、見えていないのかを整理しなくてはいけないという思いがずっとあって、意義にこだわったのだと思います。まじめですね。(笑) 事業成果を得るために、たしかに、ひとつの手段としてアートを語っていた側面がありました。地主さんはそれに毎回反発しているなと感じていました。

中尾●そういった葛藤はなんとなくですがわかりました。でも、ちゃんと言葉で殴りあえることは重要ですよ。

地主●言っても絶対に通じそうにない人には言いません。でも、金さんも私のしていることをおもしろいと思ってくださって、「アートと研究のちがいを知りたい」とおっしゃったので、せっかくだからととん議論してみたいと思ったんです。

アートが社会貢献とか、地域活性化のために都合よく使われることはよくあります。でも、この本では、そういう限定的なカッコつきのアートではなくて、自分にとっていまだ謎で興味がつきない「アートとはなにか」という大きな問いを金さんにもぶつけてみたかった。自分でも「なんでこんなにガチでぶつかっているのだろう」と思っていたのですが。(笑)

中尾●どれくらいまでそれをつづけましたか？ 最後は、妥協しましたか？

金●折れなかった。(笑)

地主●折れていないです。(笑)

中尾●二人とも折れていない。(笑) でも、いまは満足されているのでしょうか？

金●お互いに折れずに、認めあって話しているうちに、「あ、ここだ」という感覚がありました。

地主●私もそういうふう感じています。



梅原志歩さん



地主麻衣子さん



金セツピョウ

## 対話を通して成長する

中尾●本書の対話篇のあとで、金さんは総論を執筆していますよね。金さんが書かれた総論は、死そのものに向かってゆくというか、死そのものという主題をどんどん深めようとされていて、これまでの金さんの研究ではどおりついていなかったところまで深く到達していると思いました。それはこの対話のやりとりを経て到達したと思いますし、その過程が書かれていると感じます。

大澤●私も同じ意見をもっています。書籍のなかで、著者自身が変化してゆくのをとらえられるというのは、これは対話篇のすばらしさだなと。

中尾●対話の重要性を語ったり、相互理解を語ったりすることだけではその一歩さきにゆけないと思います。この本じたいで殴りあって、そのさきのなにかに触れようとするということをやってみせた本なのだと思います。

総論で金さんが死そのものの解釈に挑んでゆく前のあたりでは、鄭梨愛さん<sup>\*3</sup>の作品の解釈を反芻しながらそこに入ってゆきます。撮影することがはらむ暴力性の問題と、それをくぐり抜けたあとで、またべつな新しい到達点にゆこうとしている。その一周まわってきたあとの軌跡は、人類学の文脈では、ポストコロナリズム<sup>\*4</sup>における他者への暴力をふまえたうえで、そのさきへと進むひとつの解答なのかなと思いました。

## 抵抗としての本づくり

金●梅原さん、じつは私、梅原さんのSNSをたまに覗いていて……。(笑)「本をつくること、それじたいがひとつの抵抗

である」というふうにかかれたことがあって……。なんとなく意味はわかるのですが、梅原さんの口からどういう意味か聞きたかった。それと、この『葬いとカメラ』はなにに対する抵抗になったのかを知りたいです。

梅原●それを書いたのは、小田急線での女性刺傷事件(2021年)があったときだと思います。ニュースなどでは「無差別」と報道されましたが、女性を狙っていることはあきらかでした。

私は生まれたときに女という属性を割り当てられていて、ミソジニー<sup>\*5</sup>的な発言やハラメントなどを受けてきた経験も少なからずあります。こういう女性蔑視もそうですし、マイノリティに対して社会や制度が強いてくることに対しても、本を出版することで、なにか問いかけることができるんじゃないかという思いで編集しています。

個人的なことなのですが、『葬いとカメラ』にかかわる少し前に、人間関係でもめたことがあったんです。原因はイデオロギーにかかわる問題だったんですが、そのあと、他者と深くかかわって自分自身が変化してゆくことに恐怖感をもってしまっただけで、そうした時期に金さん地主さんと出会いました。

この本のテーマとなる「葬いと撮影をめぐる権力と暴力」について深く突っこんでゆくお二人をみて、もっとこの人たちから聞いてみたいことがあると思ったんです。マイノリティとマジョリティの関係性についても、あらためて考えることができるかなと。そのために、この『葬いとカメラ』が必要だったのかなと思います。そうした思いがあって「〈解題〉討論を終えて」を提案しました。

\*2 人間文化研究機構が運営する研究事業

\*3 美術家。在日コリアン二世である祖父が韓国に墓参りに行く映像作品を制作し、映像撮影者が撮影対象の知識や感情をほんとうに内面化して理解できるかどうかについて、書籍内で金と議論している。

\*4 過去からつづく西洋中心主義的な知識と実践を反省する人文・社会学の思潮。人類学は現地調査における調査者と被調査者の関係性の再考を迫られた。

\*5 女性に対する憎悪や嫌悪

(写真右から)

おおさわ・たかまき

金沢大学国際基幹教育院 講師。専門は社会人類学。2017年から2022年まで研究プロジェクト「熱帯泥炭地帯社会再生に向けた国際的研究ハブの構築と未来可能性への地域将来像の提案」在籍。

なかお・せいじ

京都大学アジアアフリカ地域研究研究科 助教。専門は歴史人類学。2017年から2021年まで研究プロジェクト「サニテーション価値連鎖の提案—地域のヒトによりそうサニテーションのデザイン」在籍。

きむ・せつびよる

人文知コミュニケーション。専門は文化人類学。現代の葬儀と死生観について研究している。

じぬし・まいこ

アーティスト。「わたしたちは何者なのか」という問いのもと、人間という存在の複雑さを、個人の感覚または社会的な視点からみつめ、作品制作をおこなっている。

うめはら・しほ

左右社編集部勤務。人文書、芸術書を中心に編集。担当書に、「ユリアエプナー」ゴイングダーク、坂口恭平『Water』など。



中尾世治



大澤隆将

大澤●梅原さんは梅原さんで、この本がご自身にとって必要だったのですね。

梅原●「読者のために本をつくる」みたいによく言われますが、編集者は自分のためにつくっているところもありますよね。(笑)

大澤●おもしろい話ですね。地球研でもしばしば研究方針を好奇心で決めるのか、問題解決をめざして決めるのか、みたいな議論がある。正解はないけれど、やはり自分のためにするほうがモチベーションは高いですよ。(笑)

梅原さんは「総合討議」の後に、「解題」を置くことを提案されたそうですね。この企画意図についてお聞かせください。

梅原●はじめに私に送られてきたのは「総合討議」のところまででした。これじたいも、とてもおもしろいなと思って拝読したのですが、大人数でしゃべられているので、みなさんの一言ひとことがわりと短くまとめられていました。その場では出なかったおもしろい話や後日談が絶対あるだろうと思っていて、それをお聞きしてみたいなど。それで、「〈解題〉討論を終えて」を金さんと地主さんでつくってくださるかというお話をしました。

地主●「解題」がない時点の原稿だと、議論

が深まらないまま途中で投げ出されて、そのままその章が終わってしまう、というところが結構ありましたね。

でも、当初は合宿の記録集として編集していたこともあって、補足説明を入れることはしませんでした。討論に参加した人が実際に言っていないことを書くわけにもいかなかったので、仕方ないと。議論が流れてしまった部分は、だいたい言葉にするのが難しく繊細な問題が含まれていたのですが、梅原さんが「解題」でそこに鋭くきりこんでくださいました。それについて答えるのは、かなりたいへんでしたよね。

金●ほんとうにたいへんでした。(笑) 本質的な質問をしてくださるわけですよ。zoomで、何回くらい話しましたかね。

梅原●3時間を、3、4回ですかね。

「解題」では、カメラを回して撮ることの暴力性とか、そこに生じるマイノリティ性、マジョリティ性といったことについてお二人に質問しました。地主さんの提案で鄭梨愛さんにも入ってもらって、日本籍である地主さんと在日朝鮮人でオールドカマーの鄭さん、ニューカマーである金さんそれぞれの立場からお考えをうかがえたのは得難いことでした。

金●この本は二段階のかたちの「統合」というものがあつたと思いました。ひとつは、合宿の前後で、座談会参加者の11人の知の

統合です。そのあと、書籍化するにあたり、共有された知識を読者にどういった方向にとらえさせるかということについて、もっとマクロな研究者としての私とアーティストとしての地主さんとのあいだでの統合がもう一回あつて……。ここに梅原さんが加わって、私たちから抜け落ちていた視点を拾ってくださいました。

そうした、議論しながら知識を共有し、情報を取捨選択しながら書籍というかたちに整えてゆく作業を「知の統合」とよべるのであれば、その統合のしかたが漸しかつたかなと。なにかまとまりをつけるとか、だれかが譲ること、たとえば人文の学問寄りにもつてゆくとか、アート寄りにもつてゆくとか、そういうことではなくて、それぞれの知を生かしたまま着地点を見つけることができた。なんでそういうふうになったのかは謎なのですけど……。(笑) そういう統合のあり方もひとつあるのかなというのは思いますし、ほかのところにも応用はできるのかな。

### 言語化と映像化

大澤●ちがう方向からお話をうかがいたいと思います。「死」は『葬いとカメラ』の中心的なトピックですが、ひとの死ってめちゃくちゃに抽象的な概念じゃないですか。とてもじゃないけど、その中身を言葉で表すことはできないと思うんです。できるのは、この本でもされているような遺族の思いや葬儀なんていう、死とつながつ

(次ページにつづく)



『We Don't Need a Grave』 (金セツピヨル 2014、29分)



『We Don't Need a Grave』 (金セツピヨル 2014、29分)

## 対話を編む

## 『葬いとカメラ』座談会

ていると思われる、一部分をきりとりつてみせたり語ったりすることだけです。

中尾●直接的には「死」は表象できないですよ。

大澤●「死」って、みんな知っているし、一般的な言葉だけれど、意味が膨大すぎてそれを直接的に扱うのがとてもむずかしい概念だと思うのです。こうした「死」というトピックにどう挑んだか、方針・意気ごみみたいなものってありましたか。

金●直接的に語れないものの代名詞として「死」があります。なぜなら、絶対にこれも経験できないことだからです。そうした意味で、たぶん私はまだ死を扱っていないのだらうと思います。むしろ研究するにつれてどんどん遠くなっていったような感覚があります。

でも、カメラがそれをとらえていると思っています。私は撮っているときでも、あるていど言語で考えながら撮っています。論文を書くときに近いような感じで、こういうふう構成しようか思いながら撮るときもあります。でも、カメラじたいが、私の言語的思考の限界を超えるものを撮ってくれるのです。地主さんの作品も、私たちが語れない、表現できない死というものを感覚的に捉えていると思います。

大澤●言語化できるものと、できないものというトピックは本のなかでも繰り返しふられました。ただし、人文社会科学の研究者の仕事のひとつは、言語化しにくいも



岐阜県のとある旅館での「映像合宿」の様子

のや、まだ言語化されていないものを言語化しようとするにもあると思います。そのあたり、挑まなかった？

金●やはり、言語化できないものはできません。だから、そこは謙虚にならないといけない。でも、なんとか近づこうとしないといけないということかな。映像化はそのひとつの手段かもしれません。

中尾●言語化できないものにもいろんな種類があると思います。たとえば、死は、それじたいとして、言語化することがむずかしいです。つまり、事象として、語る主体が存在せず、言語化ができないというものがあります。

もうひとつ、言語化できないものとして、「なんかいい」とか「なんか残したい」といった感覚的なものがあると思います。そうした言語化できないものに、映像が「触れる」ことはできると思います。研究者が「触れた」映像を見ると、過剰に意味を読みとるので、言語化できないものについて、映像が研究者に意味を生産させる装置ともなっている

気がします。

地主●金さんも意識していないうちに映りこんでいるとおっしゃっていましたが、映像編集のとき、なかば無意識的に「ここを残そう」とか「このシーンのあとにあのシーンをもってこよう」と判断することもある。それは感覚的なもので、自分がなぜそうするのか完全には理解できていないこともあるんですね。だから、しばらくたってから、自分で「あ、あれはこういうことだったのか」とわかるときもあります。

(笑) 人から言われて、「そう言われてみれば、そう思っていた、かも」みたいなことも……。(笑)

大澤●そうしてみると映像は、言語化されないものを残すポテンシャルみたいなものがあるのかもしれないね。

## まとめない「まとめ」

金●さて、進行の大澤さん、最後にこの座談会の「意義」を、まとめなくてもいいのですか。(笑)

大澤●そうしたいところですが、今回はやらなくていい気がしています。対話は議論が百出するのがいいところで、それにかかわるそれぞれの人たちがそれぞれの受け取り方をするのも、いいところです。そのあたり、この座談会で確認できました。なので、意義を示さないのをまとめとしましょう。(笑) 結局、意義を強調するのは、アートはもちろん、学問でも本質だとは思いません。今回の座談会でそれをやるのは、無粋でしょう。

(2021年12月14日 地球研ハウス「なごみ」にて)



地球研ハウス「なごみ」での座談会の様子。議論はとても盛り上がり、予定の時間を大幅にオーバーした

# サトウヤシ繊維ネットの可能性 地球研の苑路脇で実験中

報告●アンディ・パティワレ・メタラガクスマ（プロジェクト研究員）＋アミ・アミナ・ムティア（プロジェクト研究員）

地球研のSRIREPプロジェクト（高負荷環境汚染問題に対処する持続可能な地域イノベーションの共創）は、研究活動の一貫として「サトウヤシ繊維ネット」を開発。このネットは、インドネシアのゴロンタロ州で、日用品の原料として活用されているサトウヤシ繊維を使ったもので、地域の新たな産業創出に貢献するねらいもある。その実用性を検証しようと、2022年4月19日、地球研の苑路沿いで実証実験が始まった。その経緯報告をかねて、この活動にこめられた思いを担当メンバーが語る

「サトウヤシ繊維ネットの開発が、環境問題の解決にどうつながるの？」と、疑問に思われる方もおられるかと思います。まずは、SRIREPプロジェクトの目的と活動内容をご紹介します。

## SRIREPプロジェクトと「サトウヤシ繊維」の関係

SRIREPプロジェクトの研究対象のひとつが、インドネシアのスラウェシ島の北部、ゴロンタロ州にある零細小規模金採掘地域（以下、ASGM地域）です。ここでは、金採掘で生業をたてる数多くの低所得者が暮

らしています。

世界各地のASGM地域がそうであるように、このゴロンタロ州でも、金採掘にともなう水銀汚染が深刻です。金を抽出する過程で使用する水銀が蒸気となって大気中に放出されることで、周辺の生態系が汚染されるだけでなく、採掘作業にかかる労働者をはじめ、周辺に暮らす住民にも深刻な健康被害が生じています。

「すべての元凶である金採掘を禁止すれば、環境汚染や健康被害をくい止められるのでは？」と、みなさんは考えるかと思えます。でも、はたして、それだけでよいのでしょうか。

金採掘を禁止すれば、たちまち困るのは地域住民です。主たる生業を失った人たちは、いつその貧困状態に陥ります。水銀による環境汚染は軽減できるかもしれませんが、これからもこの地で暮らさなければいけない人たちの未来は、いったいどうなるのでしょうか。

いまを生きる人たちの幸せに結びつかないのだとしたら、「環境問題を解決した」ことにはならないのではないかと。少なくとも私たちは、そう思っています。

そんな思いから、私たちSRIREPプロジェクトは、ゴロンタロ州のASGM地域で、金採掘に代わる「持続可能な新産業」を創出しようとしています。その具体策のひとつが、冒頭で紹介した「サトウヤシ繊維ネット」の開発なのです。

こうした代替産業を軌道にのせ、将来的には、金採掘事業の規模を縮小することで、近隣の村からASGM地域に流入する労働者の数を抑制し、水銀の排出量を削減することをめざします。まずは地域の貧困問題の改善を促し、その一環として環境問題の解決に取り組むのです。

## インドネシアでのサトウヤシ繊維の使用事例

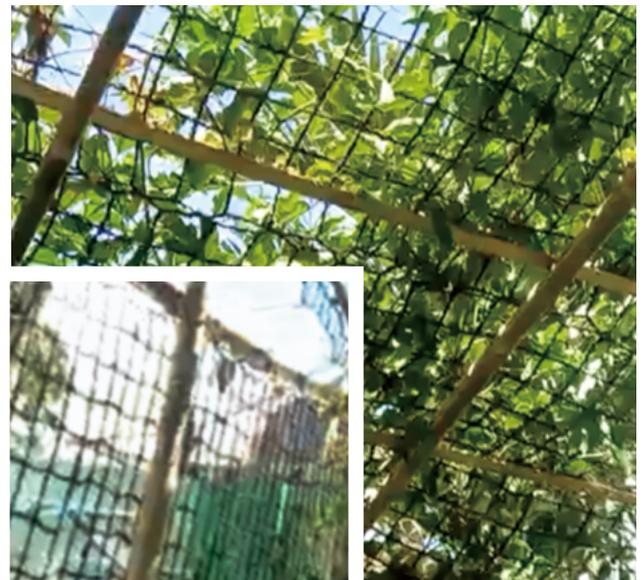
インドネシアでは何世紀にもわたって、日常生活のさまざまな場面で、サトウヤシ繊維が使われてきました。掃除用のほうきや玄関マットなどの身近な生活用品のほか、屋根材や竹材を固定するロープなどの建築資材、汚水処理フィルターとしても利用されています。

サトウヤシ繊維は腐敗しにくいうえに耐水性も高く、酸や海水塩への耐性もあり

（次ページにつづく）



ゴロンタロ州に育つサトウヤシの葉や枝の繊維を天然繊維ネットの原料として活用。写真は、砂糖の原料となる樹液の採取の様子（ゴロンタロ州）



サトウヤシ繊維ネットを使用した屋根でパッションフルーツを栽培中（上）  
垂直に設置して、つる性の植物をはわせれば、グリーンウォールにもなる（下）

## サトウヤシ繊維ネットの可能性 地球研の苑路脇で実験中

研究プロジェクト

「高負荷環境汚染問題に対処する持続可能な地域イノベーションの共創」



活動の詳細はこちら→

ます。サトウヤシの繊維で編んだロープは、ココナッツ繊維などとくらべて、伸縮率が小さく、強度が高いという特性もあります。

さらに、こうした天然繊維は、微生物などの作用によって、時間をかけて徐々に無機物に分解される（生分解性）という特徴があります。身の周りにあふれているプラスチック製品を天然繊維を原料とする製品で代替できれば……。そう考えると、サトウヤシ繊維の可能性はさらに広がります。

たとえば、日本でも使用されている、地滑りや土砂流出を防ぐ砂防ネットには、おもにプラスチック繊維が使用されていますが、これを天然繊維に置き換えてみるのはどうでしょうか。サトウヤシ繊維ネットの普及は、インドネシアの住民の収益アップにつながるだけでなく、世界各地の「プラスチックごみ問題」の解決にも貢献できるのではないのでしょうか。

SRIREPプロジェクトの「サトウヤシ繊維ネット」開発には、そうした期待もあります。

### 天然素材の サトウヤシ繊維の可能性

私たちは現在、プロジェクトメンバーの一員であるエスペックミック株式会社（日本）の協力のもとに、ゴロンタロ州の4つの村で、サトウヤシ繊維ネットの試作品の開発に取り組んでいます。

製造工程はすべて、ゴロンタロ州の村民たちによる手作業です（右図）。金採掘に代わる新しい産業としてなりたつよう、生産性と品質の向上をめざして、村民とともに試行錯誤を重ねています。

このネットは、土砂流出防止の砂防ネットとしてだけでなく、ゴーヤやアサガオなどのつる性植物を這わせて育てる園芸用品としても利用できます。繊維ネットを利用した壁面緑化は、直射日光を遮り、建物の表面温度の上昇を抑えるので、冷房費を抑える省エネ効果があるほか、緑化による景観向上なども期待できます。

私たちは、このサトウヤシ繊維ネットを商

品化して、インドネシア国内はもちろん、日本をはじめとする他国にも販路を拡げる予定です。

### 地球研で、サトウヤシ繊維ネットの使用効果を検証中！

京都大学上賀茂試験地の一角の斜面地にある地球研は、山肌が建物の間近に迫ります。エントランスにつづく苑路脇は傾斜がとくに急で、雨などによって苑路脇の

土壌が削られ、歩道にまで流れ出していることがあります。これを防ぐために、プラスチック製の砂防ネットが張り巡らされています。そうです、地球研は「サトウヤシ繊維ネット」の絶好の実験地帯なのです。

私たちは、エスペックミック株式会社の協力のもと、2022年4月19日に、地球研の苑路脇の一角に、縦1.8メートル、幅3.6メートルにわたって、サトウヤシ繊維の砂防ネットを試験的に設置しました。その後の経過は、右ページのとおりです。

プラスチックはいまや、私たちの生活に欠かせない存在ですが、海洋に漂うマイクロプラスチックをはじめとして、生態系への悪影響が深刻化しています。プラスチック製の砂防ネットも同様で、長年使い続けると、紫外線等で繊維が劣化します。これがマイクロプラスチックとなって土壌に入りこむと、土壌汚染が進み、植物の生育に悪影響をおよぼすことが知られています。

私たちのこの実験によって砂防効果が実証されれば、将来的には地球研の敷地内で使用されているプラスチック製の砂防ネットを、生分解性のある天然繊維由来のネットにすべて置き換えることを提案したいと考えています。

サトウヤシ繊維をはじめとする天然素材の製品の普及は、インドネシアのみならず、各国の防災・減災や、環境問題の解決に貢献できるだけでなく、環境負荷の少ない持続可能な「脱プラスチック」社会の実現にもつながっているのです。

\*

地球研のテーゼに「環境問題は人間文化の問題」という言葉があります。SRIREPプロジェクトは、環境問題の解決を考えるうえで、そこに暮らす人たちの生業を中軸に据えています。そうした視点が、人と自然との関係の持続可能性、未来可能性につながると信じているからです。

インドネシアの人たちが手づくりで生み出すサトウヤシ繊維ネットは、人と自然をつなぐ、ひとつの希望だと考えています。

#### サトウヤシ繊維ネットの製造工程



原料のサトウヤシ繊維（左）と完成したロープ



サトウヤシ繊維を紡いでロープをつくる



ロープをネット状に編む

サトウヤシ繊維ネットを用いた実験のようすを知らせるカードも設置



Ami A. Meutia  
二〇一〇―一七年には地球研「ナガシメプロジェクト」にて同財団のプロジェクトで活動二〇二一年からはSRI-REPプロジェクトに参加。専門は陸水学。植物を使った排水処理および湖とため池の生態社会環境や環境教育に取り組む。本プロジェクトではASGMに関する研究をしている。



Andi Patiwara  
Metaragakusuma  
二〇一八年に愛媛大学大学院農学研究科農村開発学専攻博士課程修了。博士研究員を務めたのち、愛媛の地元企業に勤め、インドネシア人研修生受け入れのプロジェクトなどに従事。二〇二一年からSRI-REPプロジェクトに加わり、インドネシア・ポーンボランゴ地区のASGM活動による水銀汚染の克服をめざし、実践的な研究に取り組んでいる。



### サトウヤシ繊維ネット設置後の経過観察



設置当日 (2022年4月19日)

サトウヤシ繊維ネットを設置 (高さ1.8m×幅3.6m、メッシュサイズ10×10cm)



設置後 3週間 (5月12日)

ネットの網目から植物が枝葉を広げはじめた。ネットの設置が植物の生育を妨げないことを示している。



設置後 1か月 (5月19日)

ネットと斜面の土壌とが密着し、網目をくぐって育つ植物がさらに増える



設置後 40日 (5月28日)

植物の成長時期とも重なって、植物の数はさらに増加。どれも旺盛な生育ぶりである



設置後 約3か月 (7月15日)

成長した植物の枝葉がサトウヤシ繊維ネットを覆いはじめる。植物の根は、雨水が土壌に浸透するプロセスを助けるとともに、斜面地の土が崩れるのを防ぐ効果もある



設置後 約6か月 (9月29日)

設置から6か月が経過しても、サトウヤシ繊維ネットの状態は良好で、植物は成長しつづけている。木々の落ち葉はネットにからまって堆積し、微生物の作用でやがて腐葉土となる

撮影：2015年4月  
ミャンマー ダウエイ

表紙は語る

開発の槌音に耳をすませて……

君嶋 里美 (研究員)

ミャンマー南部にあるダウエイ特別経済特区 (SEZ) では、深海港、石油精製工場、発電所等の建設が予定されている。

開発が完成すれば、このダウエイ SEZ は東南アジア最大の経済プラットフォームになる。さらに、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムを横断するメコン地域南部経済回廊の整備により、この地域はインドシナ半島を横断する物流ルートの要衝として大きな役割を担うことが期待されている。

しかしながら、開発にともない、周辺地域での社会・環境への負の影響なども懸念さ

れている。昔から農業や漁業を営んできた多くの現地住民たちは移住を余儀なくされる。そのため、環境汚染や生態系の破壊だけではなく、移住にともなう土地の補償や生活の再建、文化継承への影響など、多くの課題をはらむ。

国際的サプライチェーンの構築が進むなか、私たちの周りにあふれるモノを通して、間接的に途上国の環境破壊や社会問題に負担しているかもしれない。開発の槌音が近づくなか、山頂の寺院で遠くを見つめる少年僧侶は、なにを思うのか。

●表紙の写真は、「2019年度地球研写真コンテスト」の応募写真です。

## 編集後記

2020年のCOVID-19パンデミック発生以降、野外フィールドをもつ研究者は、その生命線でもある現地調査をいくどとなく断念してきました。現在、その傾向は少しずつ改善されているようで、私が地球研に着任した2022年5月以降は、少なくとも国内での調査は円滑に進められたように思います。それでもいまだに、海外や僻地での現地調査を行なえずに窮する研究者が少なからずいるようです。

本号巻頭には、京大の人類進化論講座出身である山極所長と京都精華大の澤田学長の対談を掲載しており、お二人がまだ若手研究者だった時代に、アフリカでのフィールドワークで心ときめかせた経験を回想されています。おなじように、多くの研究者がフィールドでの忘れられない経験をもっており、コロナ禍で調査を断念しようとも、現地調査への強い望みを抱きつづけているのではないのでしょうか。

2023年は、フィールド調査を諦めつづけた研究者たちが、あらためて躍進する年になることを願うばかりです。そして、本号の内容が、各研究者のフィールドへの熱い思いを、いまいちど奮いたたせるきっかけとなることを祈っています。

(友尻大幹)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」

Humanity & Nature Newsletter No.87  
ISSN 1880-8956

発行日 2023年1月30日  
発行所 総合地球環境学研究所  
〒603-8047  
京都市北区上賀茂本山457番地の4  
電話 075-707-2100 (代表)  
E-mail newsletter@chikyu.ac.jp  
URL <https://www.chikyu.ac.jp>

編集 定期刊行物編集室  
発行 コミュニケーション室  
制作協力 京都通信社  
デザイン 納富進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。

編集委員 ●阿部健一 (編集長) / 三村 豊 /  
嶋田奈穂子 / 大谷通高 / 君嶋里美 /  
友尻大幹 / 藪崎志穂 / 由水千景

バックナンバーは <https://www.chikyu.ac.jp/publicity/publications/newsletter/>

